

# 市田陽児教授・小阪隆秀教授・ 福田昌義教授定年退職記念特集

## 「現代社会と企業経営」

1973年の石油ショックに象徴されるように、70年代初頭以降、現代社会は大きな構造転換に直面しているとされている。フランスのレギュラシオン学派に代表されるように、第二次世界大戦後、先進諸国の経済構造を規定してきたのは、大量生産とそれに基づく官僚制組織、ならびに大量消費であった。このような経済構造は、第二次世界大戦後の経済発展の過程でさまざまな問題に直面し、1973年の石油ショックを契機として、変革を迫られることになった。

現代の企業は、このような大量生産・大量消費という経済構造の発展をもとに発展を遂げてきた。もちろん大量生産・大量消費という経済構造の展開は、企業経営にさまざまな経営問題を生じ、企業は量産体制を基盤とする経営問題に対処することが求められた。こうした問題の解決に寄与してきたのが、経営学であったといえる。量産体制の確立にともなう管理職能の構築に寄与した管理技術・職能論や、市場問題に対する企業経営のあり方を問う経営戦略論などがその代表的なものであろう。

けれども1970年代初頭以降、大量生産・大量消費を基調とする経済構造は、多くの問題を露呈し、その構造の転換を迫られることになる。経済構造の転換という局面において、現代の企業は新たな経営問題の解決に直面するにいたった。たとえば経済のグローバル化や経済の金融化、さらにIT化などの問題を指摘することができるだろう。構造転換にともなう経営問題の現出とともに、経営学はさまざまな研究を蓄積してきた。

さらに1990年代以降のグローバリゼーションのもとで、現代企業は、これまで以上に複雑で多様な経営問題に直面するにいたっている。実際、大量生産・大量消費を基調とする経営行動は、環境問題を生み出し、さらに1990年代初頭から、日本では中小企業の減少が進んだ。それとともに創業や事業承継の問題が注目されるようになり、さらに少子高齢化の進展とともに、人材やタレントの育成・活躍が注目されるようになったのである。このような経営問題の多様化とともに、新たな経営理論も必要とされている。

本特集は、市田陽児先生、小阪隆秀先生、福田昌義先生の定年退職を記念して企画されたものである。市田先生は、自動車産業の情報化を主な研究の領域とされており、また小阪先生は、現代社会の分析に重要な官僚制組織の研究をもとに、自動車産業のネットワーク化などを研究されてこられました。福田先生は、ご自身の実務での経験をもとにベンチャー・ビジネスと、その研究を踏まえた社会的企業家の研究を進めてまいられました。このように3人の先生は、現代社会の企業経営の問題に取り組んでこられたといえます。

そこでこの特集では、3人の先生のご研究を踏まえ、多様化する現代企業の経営問題とその理論について検討するという課題を設定いたしました。本特集は、長谷川勉先生の提案のもとに日本大学商学部の経営学科の先生がたのご支援の下に進められた企画であり、今回残念ながらご投稿いただけなかった先生がたにも多大なご支援を賜ることができました。ご厚情に感謝いたすとともに、3人の先生がたの一層のご活躍を念じて特集の趣旨の結びとさせていただきます。先生がたほんとうにありがとうございました。

日本大学商学部教授 平澤克彦